本山寺五重塔

三豊市指定有形文化財

「本山寺五重塔 平成大修理」に寄せて

本山寺と香川県立ミュージアムの交流は、前身の(旧)香川県歴史博物館の建設準備室時代までさかのぼる。

当該準備室では、香川県内の寺院や神社が所有する文化財調査を重要業務に位置付け、古文書、彫刻、工芸等のさまざま文化財について学芸員による精緻な調査を実施した。

なかでも本山寺の調査は、その先駆けとも言える“記念碑”的なもので、同寺の多大な協力のもと平成6〜10年度まで「本山寺聖教文書等調査事業」として文化庁の補助を受けて実施した。

同寺が所有する古文書、古記録、聖教類、彫刻、書画、工芸、歴史資料を対象として調査を行い、平成11年3月に口絵40頁、本文734頁の大著「本山寺総合資料調査報告書」を刊行した。

当該調査の結果、本山寺の歴史の解明が飛躍的に進捗したことは言うまでもなく、所有する文化財のうち、特に価値が高いと判断された「木造愛染明王坐像」「木造金剛力士立像」「木造善女龍王像」「本山寺蔵経文板木」が香川県指定文化財となったことは特筆すべき事項である。

以上のように香川県立ミュージアムによる本山寺所有の文化財調査は、香川県の歴史の解明や文化財の保護等において重要な地位にあることは明らかであるが、今回の本山寺五重塔の解体・保存修理事業に際してもその調査結果は如何なく発揮されていると言える。

同事業の進捗に際しては、かねて明らかとなっていた古文書や古記録等から五重塔の建設工事に関する資料に再び光が当てられ、今後の保存修理に当たっての重要な手引きとなっているのである。

香川県立ミュージアムでは、同事業の進捗に際しては蓄積した情報を随時提供するとともに、新たに発見される文化財の調査に協力を惜しまないものである。

これが香川県立ミュージアムの建設に当たってひとかたならぬ協力をいただいた本山寺に対する感謝の証しと考えている。

香川県立ミュージアム　副館長　西岡達哉

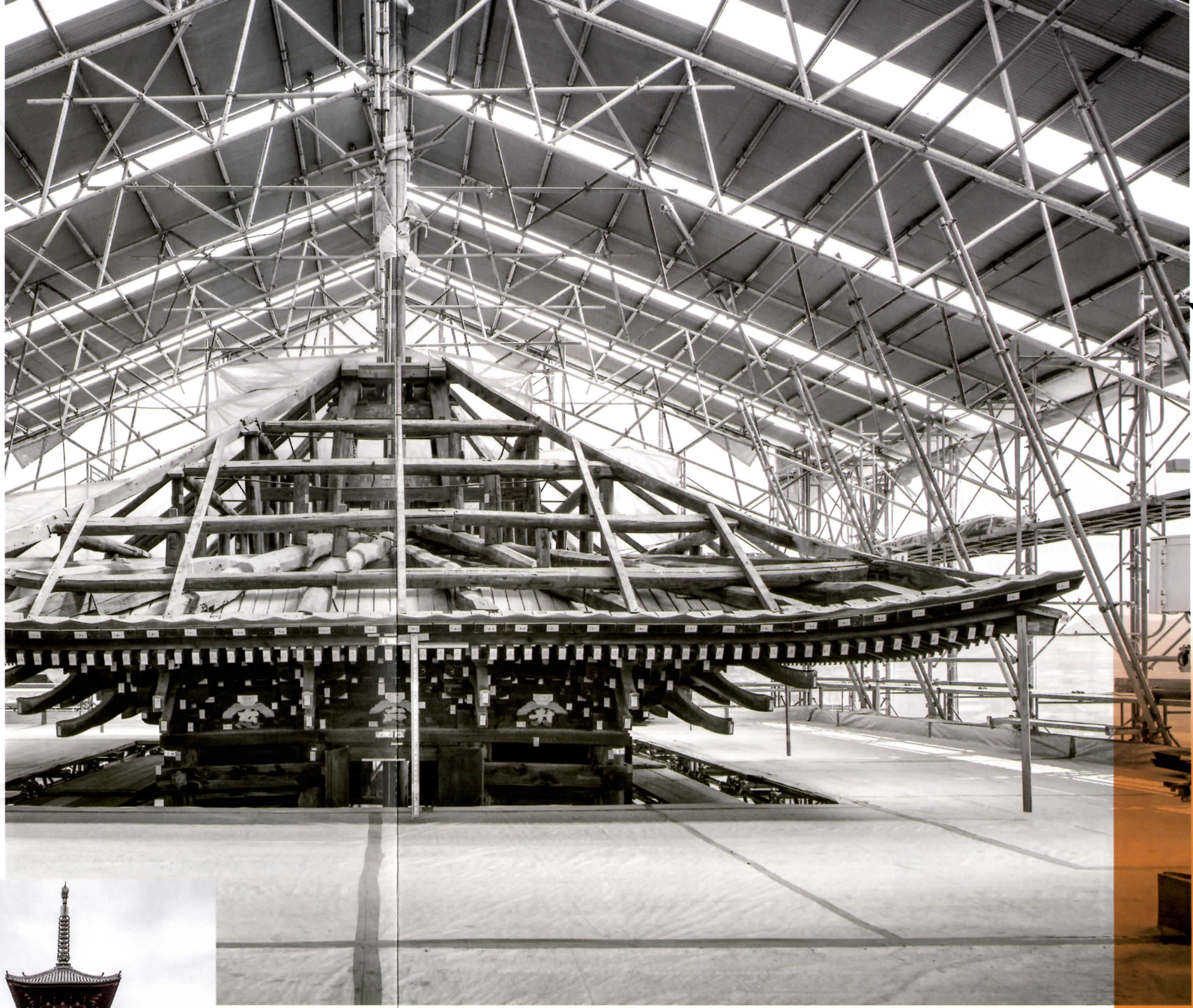


写真:淺川 敏

■本山寺五重塔の概要

発願主:	本山寺住職　頼富実毅(1846-1916)
大工:	平間美能介勝範、多田寅市
構造及び形式:	木造三間五重塔婆、本瓦葺
高さ:	約32m
重さ:	約120t(現在調査中)
建立記録:	明治29年 斧始
	明治31年 第一重(初重)上棟
	明治33年 第二重上棟
	明治36年 第三重上棟
	明治43年 第四第五重上棟

平成大修理[現場見学会]

開催日:平成28年6月4日(内覧会)・6月5日
主催:本山寺、本山寺五重塔整備委員会
共催:三豊市教育委員会
協力:多田善昭建築設計事務所、伸和建設(株)

■七宝山持宝院本山寺

大同2年(807)平城天皇の勅願として弘法大師により創建されたと伝わる、四国霊場第七十番札所の真言宗の寺院です。本尊は四国霊場唯一の馬頭観音、脇侍には薬師如来、阿弥陀如来が控えます。嘉永7年(1854)の火災や維新政権の宗教政策などで一時荒廃していましたが、明治22年(1889)に住職に就任した頼富実毅(よりとみじつき)により復興が進められました。現在境内には、国宝「本堂」、国指定重要文化財「仁王門」、県指定文化財「鎮守堂」、市指定文化財「五重塔」のほか、登録有形文化財を含む多くの堂塔が建ち並び、厳かな雰囲気のなか季節の花木とともにお遍路さんを迎えています。

■五重塔建立までの道のり

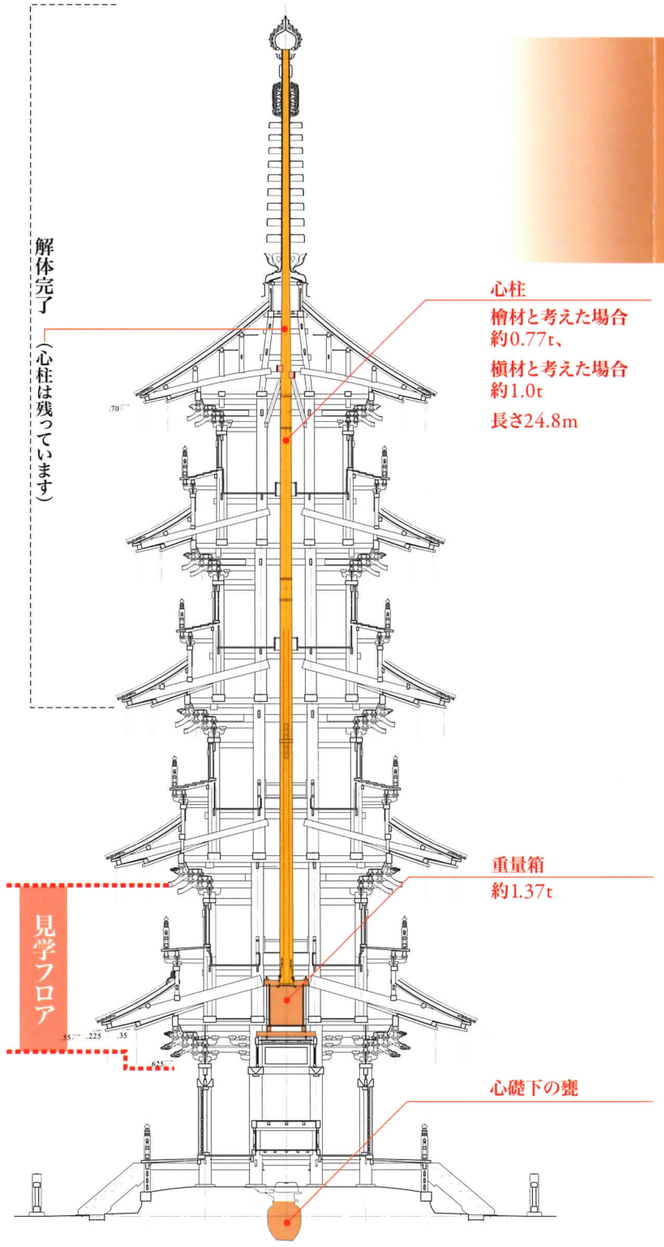
五重塔の建立は、完成までに十四年以上の歳月を費やした大事業でした。明治維新後の寺院に対する厳しい向かい風にも負けず、また日清戦争、日露戦争の戦禍に見舞われながらも、頼富住職は強い意志を持って日本各地幾百万の善男善女の想いをあつめ、かたちにしたのです。本山寺復興の象徴として、また四国霊場に四基しかない五重塔の一つとして、落慶以来百余年もの長きにわたり、凛とした姿で私たちを見守り続けてきました。

[三重上棟の後中断]
日露戦争や資金難が考えられる

[完成に近づいた五重塔]
足場に立つ大工の姿が確認できる

■明治期らしい技が光り輝く塔

懸垂構法の心柱、各階に床を張り参拝者を登らせる仕組み、装飾的な組物などは、いずれも江戸後期に生み出されたものですが、本山寺五重塔は江戸期の塔婆建築を継承しつつ、明治期ならではの技を付加した貴重な例です。明治期に完成した五重塔は全国でも少数であり、構造的にも信仰的にも興味深い発見が続いています。本山寺五重塔整備委員会では、伝統的構法や本山寺五重塔ならではの特徴を壊さずに、可能な限り在来構法の延長上での保存修理、耐震補強に取り組んでいます。



[初重の獅子鼻、龍頭] 塔婆建築としては装飾的であり江戸後期以降の特徴(★)

チェックポイント

1 懸垂構法の心柱

五重の小屋組(左義長柱)から貫で吊られた心柱は、地面まで伸びず二重の床で止まっています。心柱の底には檀信徒の想いが宿る経石でいっぱいに満たされた「重量箱」が取り付けられていました。

[経石を詰めた重量箱]中央に伸びるのが心柱(★)

[甕内表層]

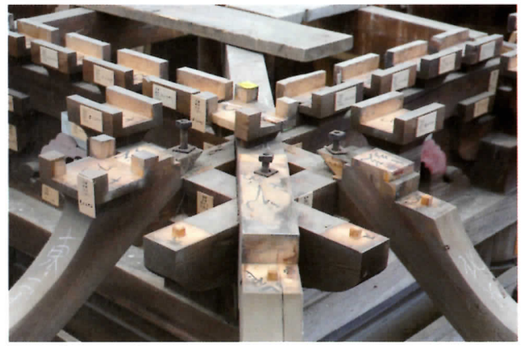
2 心礎下の甕

基壇内、心礎の下に大きな甕が確認され、現在調査中です。甕の中には経石(お経などを書いて納めた石)やカスガイ、瓦の他、地鎮の儀式に使う鎮壇具が納められていました。

[甕内鎮壇具] 写真提供/三豊市

3 木部接合の工夫

尾垂木はボルトで固定されていることが分かりました。旧軍施設などの洋風建築にも生かされた、いかにも明治建築らしい技術だと感じます。



[尾垂木]ボルトで固定されている

4 西讃地方ならではの瓦葺き

本山寺近隣では一般的に使われる隅金物ですが、社寺建築の屋根に用いられるのは比較的珍しいといわれています。また面戸瓦の葺き方にも地域の特色があらわれています。

[隅金物]

[瓦葺き工程](★)

5 相輪、風鐸

本山寺五重塔の相輪は宝珠に火焔が付くなど他の塔にはない珍しい形をしています。現在は相輪、風鐸とも客殿前に展示しておりますが、今後修理(一部新調)し、塔にもどします。

[相輪、風鐸展示](★)

資料提供:本山寺
写真:淺川敏(★)/多田善昭建築設計事務所
作成:本山寺五重塔整備委員会